

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520093

研究課題名(和文)近世東アジアにおける新知識体系とその構築に関する思想文化史的研究

研究課題名(英文)The historical and cultural studies on the New Knowledge system and its Formation in early Modern East Asia

研究代表者

李 梁 (LI, LIANG)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：20281909

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：16世紀初期から18世紀後半期、主としてカトリック修道会のイエズス会による東アジアの宣教運動は、神学思想とともに、ヨーロッパルネッサンス期の諸学芸をもたらした。それが図らずも、近世東アジアの日中朝の伝統社会における固有の知識体系—知識構造・認識論・宇宙観並びに対外観—が動揺され、当該地域に一種の新知識体系(「義理」から「物理」への転回)の発生を誘発した。当研究では、そうした歴史的事象を、思想的連鎖という視点に立って、一方では、イエズス会の教育理念とその実践活動への考察、他方では、徐光啓、新井白石および洪大容という当時の代表的知識人の知識構造とその変容への検証によって明らかにするものである。

研究成果の概要(英文)：From 16th Century to the 18th Century, lasting near two centuries, various Catholic groups, Represented by the Jesuits, translated a lot of Western knowledge of science, technology and arts of the Renaissance period either through the Catholic teaching or as a method of the Catholic mission. as a result of its encounter with the new knowledge of the Renaissance period, the traditional knowledge system of East Asia (Neo-Confucianism, or Chu-Tzu Learning) underwent great epistemological changes (in the theories and views of knowledge and the worldview)  
This studies examines how this change occurred by analyzing the changing views of knowledge of three representative intellectuals in early modern East Asia, Arai Hakuseki (1657-1725, Japan), Xu Guangqi (1575-1632, China) and Hong Dae-young (1731-1783, Korea).

研究分野：中国哲学

キーワード：近世東アジア イエズス会 新知識体系 新井白石 洪大容 徐光啓 漢学 A・ヴァリニャーノ

## 1. 研究開始当初の背景

16～18世紀の後半期、東アジア諸国での布教運動を最も精力的に展開されたのは、比較的到新参のカトリック修道会のひとつであるイエズス会である。イエズス会士は、殆ど例外なく同会の高邁な教育理念と緻密な教育計画(学事規程、Ratio Studiorum)をもって訓練され、宣教師であると同時に、どれも当時屈指の知識人でもあった。それがゆえ、彼らは、宣教の手段として、ヨーロッパルネッサンス期の各種の知識、または諸学芸を東アジア諸国にもたらしたのである。そして、こうした知識、または諸学芸は、中国、日本および朝鮮という東アジア三国で継起的に発生した実学思潮、さらに、日本江戸時代の国学、神道学、中国清代の文献考証学などのような、従来の学知の枠組みや方法論で捉えきれない、一種の新しい知識内容とその方法論の発生を誘発したのではないかと考えられる。

今迄、そういった歴史的事象に対し、国別または個々の人物に限定した研究が数多く行われたが、思想的連絡という視点から系統的な実証研究は明らかに欠如している。その意味で、本研究は、従来の研究上の空白を埋めるべく、新たな知見や可能性をもたらすものだと思われる。これは、研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

イエズス会をはじめとするカトリック諸修道会の宣教運動をめぐる、内外の先行研究はすでに夥しい成果があり、種々の観点から研究されつくしたように見えるが、知識発生学の見地にもとづき、思想的連鎖という視点による系統的な実証研究は、明らかに欠如している。そこで、先人の研究成果を参照しつつ、近世東アジアにおける新知識体系とその構築に照準した本研究は、相関する歴史または思想史研究における新たな可能性を探りだし、様々な研究領域または分野への波及を企図するものである。

近世東アジアの知の空間は、儒学的経学、つまり朱子学とその方法論によって紡がれた知識世界、または思想世界である。だが、16世紀後半から17世紀中期にかけての、広義の明末清初期において、そういった思想世界に大きな変化がみられるようになった。それは、つまり、思想世界(とくに朱子学的経学)は、従来の「義理の考証」から「物理の考証」へと大きく転回されていった、ということである。例えば、黄宗羲(1610～1695)、梅文鼎(1633～1721)、王錫闡(1626～1682)、戴震(1724～1777)らに代表されたように、天文曆算学を中心に据えた清代の経学、とりわけ乾嘉学派の文献考証学は、そうした傾向がとくに強い。これほど大きな思想的、方法論ないし世界観の変化を伴う歴史的事象をいったいどのように捉えるべきか、先人の研究成果を参照しながら、その答えを試み出そうとするのを、本研究

の目的とする。

## 3. 研究の方法

前述したように、イエズス会の東アジア諸国での宣教運動に伴って引き起こした諸問題をめぐって、従来、様々な角度からの研究がなされたが、しかし、いわば思想的連鎖という見地から、それに伴う知識(西学)の伝播、ならびに東アジア諸国に一種の新知識体系が誘発し生じられたという捉え方は欠けている。本研究では、そうした歴史的事象を、一方では、イエズス会の教育理念とその実践活動への考察とともに、それを東アジアの伝統的知的空間、とりわけ各種の公私学校(書院、藩校、私塾など)の有り様と比較検討を重ね、他方では、略同時代の東アジア三国の代表的知識人、つまり、徐光啓(1575～1632)、新井白石(1657～1725)および洪大容(1731～1783)の知識構造、並びに宇宙観、世界観(対外觀)への体系的、実証的検証を通して究明しようとするものである。

最初の年は、生憎、東日本大震災に見舞われ、大学の開学や科研費の使用も計画よりかなり遅延した。そこで、授業などの関係もあって、予定した南欧の関係文書館、図書館などの文献調査およびイエズス会学校の遺構ないしゆかりの地への踏査が果たせなかった。むろん、研究自体は着実に遂行せねばならない。とくに長年(平成17年から平成26年迄)国際日本文化研究センター共同研究員として、しばしば研究会に出る機を利用して、共同研究メンバーや他の学者との討議、学術交流のほか、国際日本文化研究センター図書館をはじめ、関西、関東の幾つかの主要大学の図書館を利用し、研究文献の収集、閲覧に努めた。そうした中で、2011年10月23日～24日、中国上海復旦大学で開催された「近代中国知識転型與知識伝播：1600～1949」(中国復旦大学歴史系、台湾中央研究院近代史研究所共催)という国際シンポジウムに参加し、「前近代東亜新知識伝播問題初探」と題する口頭発表を行い、研究のスタートを切ったと言えよう。

翌年は、前年度震災の影響で実施できなかった南欧調査を実行した。まずローマにあるイエズス会の文書館、グレゴリアン大学図書館で主としてイエズス会教育関係の文献、史料(イエズス会学校の各種カタログ)を調査した。ローマでの調査は、パドヴァ大学高名な歴史家 Ugo Baldini 教授やローマ在住のマテオ・リッチ研究者宋黎明博士から多大な教示と便宜とを頂いた。その後、集中的にマドリッド、セビジャー、リスボン、コインブラ、エボラ、ラ・フレッシュなどの都市の文書館、図書館で同様の調査を実施した。こうした調査によって、コレージュ・ロマーノ(グレゴリアン大学の前身)を範とするイエズス会学校学生の勉学生活の実態、関係文献史料の所蔵地および収蔵状況などを理解することができた。そして、各地のイエズス会学校また

はゆかりの地の現状や、『イエズス会会憲』の初版(ラテン語)をはじめ、多くの文献史料を写真撮影することもできた。

翌々年は、今度は、韓国高麗大学校、漢陽大学校、延世大学校などの図書館、ソウル市内の古本屋などで洪大容関係史料蒐集、購入した。そのついでに、本科研課題との関連で、韓国の精神的故郷といわれた慶尚北道の安東市で朝鮮史上最大な儒者李退溪と門人が建てた陶山書院、屏山書院および大邱郷校の実地調査および関係文献の蒐集を行った。この調査は、別件の科研で調査した中国武夷山の武夷精舎(福建省武夷山市)、白鹿洞書院(江西省九江市)と好個の対比となり、東アジアにおける書院の基本的理念(掲示または学則)から構造まで類似する点が非常に多いということがわかり、東アジアにおける知の連鎖の一樣相を目の当たりにした、といつてよい。

なお、本科研の最終年度の三月(2015年)、他の研究経費による九州調査を実施した。長崎歴史文化博物館をはじめ、長崎純心大学キリシタン文庫、平戸松浦史料博物館、南島原市キリシタン資料館などで文献調査を行う一方、イエズス会学校(コレジョ遺跡)ゆかりの地(長崎、島原、南島原など)を踏査した。こうした調査によって、かつてイエズス会が日本で展開された教育活動の有り様を、より直観的体験を得ることによって、その理解がさらに深められたといえる。

他方、課題研究を果たすために、不定期で、弘前大学で研究会を開催し、研究代表者および招待する関連研究者が発表を行い、相互に論評して研究の進展と深化をめざした。2014年2月12日~13日、北京大学哲学系の周程教授と北京大学出版社教育中心主任の周雁翎教授(ともに東アジア科学史・思想史専門)を招いて、前者は「勾股定理とピタゴラス定理の証明から中西理性の差異をみる - 『周髀算經』では勾股定理の証明問題を解決したのか」、後者は「科学経典の中国における伝播問題」と題する発表をしていただいた。研究代表者は、「洪大容の科学理解とその実践について」と題する発表をおこなった。このほかに、同年の8月21日~23日の日程で、京大人文研客員教授として滞在中の徐興慶氏(台湾大学教授、近世・近代東アジア思想専門)を本学に招いて、本学の関係教員との座談会を開いて学术交流を行い、なお、本科研課題および今後の研究協力、合作について意見を交わした。研究代表者のその他の研究発表については、下記学会発表に記されている通りであるが、調査研究および学会発表のついでに、努めて当地の専門家とも研究交流、情報共有を積極的に行った。例えば、マカオ利氏学社の萬徳化(Arture Wardega, S.I.)主任、マカオ大学兼暨南大学歴史系の湯開健教授および中国中山大学歴史系の梅謙立(Prof. Thierry Meynard, S.I.)は、特に本課題の研究上、多くの教示や便宜を頂いたこ

とである。

#### 4. 研究成果

(1) 江戸中期の朱子学者である新井白石の漢学と西学について予備的考察を行った産物である。一介の儒者でありながら、地方の藩政から幕府の最高機関の政策制定と実行に深く関与した新井白石は、どのように漢学と西学の知識を習得しえたのか、また具体的に、それぞれどのような内容だったのかを追求したものである(「新井白石の漢学と西学」)。

(2) 福建の名勝・武夷山付近は、北宋以降、北方文人の南来とともに、出版業が発達し、次第に濃厚な文化的香りが漂う地域となった。宋代理学の集大成者・南宋の朱熹は、淳熙十年(1183)から紹熙元年(1190)まで、自ら創設した武夷精舎に住んで、弟子の教育に専念する一方、自らの学問体系を完成させた。と同時に、この時期、優れた叙景の詩、「武夷十權」(九曲權歌)「武夷七詠」「武夷精舎雜詠」十二首を始めとする、武夷山を詠む五十首以上の詩を作成した。これらの作品群は、武夷山の詩跡化に大きな役割を果たしたが、なかでも全長十キロの九曲溪を詩跡化した「武夷十權」(淳熙甲辰中春、精舎閑居、戯作武夷權歌十首、...)は、十首の七言絶句を連ねて武夷九曲の全景を歌った名詩であり、それに懇切な評釈を加え、その意義を明らかにした(「叙景詩と詩跡」)。

(3) マルクス主義の自然科学観において、エンゲルスの遺著『自然弁証法』が果たした役割が非常に大きい。しかし、この重要な著書が東アジアに翻訳紹介された際、多くの誤解を生んだとされる。日頃、使い慣れた「唯物主義」、「弁証法」などの概念の原始的意味を再確認したうえ、エンゲルスの思想的原点に立ち帰って、その意図は、すなわち「自然科学的唯物主義」および「社会ダーウン主義」の批判にあると理解しなければならない。本訳文は、本課題研究の理論的思考に多くの示唆を与えてくれたものである(「恩格斯《自然弁証法》構思辯析」)。

(4) 南宋の淳熙六年(1179年)、朱子が再興した白鹿洞書院は、宋元交替期における一時の中断をへて、明末まで、中国だけでなく、東アジア諸国の書院作りに絶大な影響をもつものである。それは、なによりも、朱子が自ら制定した「白鹿洞書院掲示」に負うところが大きい。言い換えれば、東アジアの伝統教養、または思想世界の形成に白鹿洞書院掲示を範とする東アジア諸国の書院が果たした役割が非常に大きかった。朝鮮儒学の最高峰とみなされた李退溪(1501~1570)が創設した陶山書院、また日本江戸時代の朱子学者山崎闇斎(1619~1682)を祖とする崎門学派も、白鹿洞書院とその掲示に深く影響された

というのはその証である。本論文はそれを明らかにするうえ、白鹿洞書院に纏わる代表的詩人の幾つかの詩の読解を通して、いわゆる「詩跡」の角度から白鹿洞書院の有り様を考察したものである（「白鹿洞書院と詩跡」）。

（５）知識体系と東アジアの思想的連鎖の角度から、和漢洋にわたる新井白石の知識世界の構築およびその思想史的意義はどのようなものなにかを追求したものである。本論は（１）の論文を下敷きにしなが、近世東アジアの知性背景、それに江戸時代代表的詩人の一人とも言われた新井白石の漢詩から、その知識世界の構築を考察したものである。その場合、とくに晩年に多くの友人、学者との間に交わされた書簡から、白石の史観ないし社会観、認識論の有り様の考察を試み、彼が朱子学的合理主義者とみなされた意味を再検討した（「新井白石の知識世界序説」）。

（６）イエズス会が伝えたヨーロッパルネッサンス期の諸学芸は、どのように東アジアに伝えられ、かつ如何にして当地の知識体系の変容をもたらしたのかを探るため、どうしても東西の知的ルーツから着手せざるをえない。そのために、一方では、東アジアの伝統教養、つまり朱子学的経学の思想世界、並びにその形成、伝播、継承の実態を各種の学校（書院、藩校、郷校、私塾など）の有り様の考察を通して明らかにし、他方では、イエズス会の教育理念とその知識体系を『イエズス会学事規程』をはじめとする幾つかの基本的経典を中心に、その壮大な教育実践活動（ユーロシヤを跨る教育ネットワークの構築）に対して考察を行ったものである（「伝統教養と新知識体系」）。

（７）徐光啓と利瑪竇（マテオ・リッチ）が共訳した『幾何原本』は、中国史上初の西洋科学書である。本書は、2007年11月、中国上海で開催された同書翻訳四百周年記念の国際シンポジウムの精選論文集である。筆者は、本書において、『幾何原本』の翻訳およびその公理思想と東アジアにおける受容課程について論じた（『徐光啓與幾何原本』）。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

李 梁、新井白石の漢学與西学、漢学與東亜文化国際学術研究会論文集（ISBN988-99824-3-0）、査読有、第1巻、2011、311~324

李 梁、叙景詩と詩跡—朱熹の武夷山を詠む詩を手掛かりにして—、人文社会論叢（人文科学篇）査読無、27号、2012、65~79

<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

李 梁（訳）恩格斯《自然弁証法》構思辯析、自然弁証法通訊（Journal of Dialectics of Nature）第35巻第4期、査読有、2013、108~119

李 梁、白鹿洞書院と詩跡、人文社会論叢（人文科学篇）査読無、32号、2014、1~15

<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

李 梁、新井白石の知識世界序説、人文社会論叢（人文科学篇）査読無、33号、2015、23~35

<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

李 梁、伝統教養と新知識体系 - イエズス会の教育思想と東アジア -、『東アジア文化交渉学会第7回国際学術大会予稿集』、査読有、2015、223~227

〔学会発表〕(計8件)

李 梁、近代東亜新知識体系初探、「近代中国知識転型與知識伝播：1600-1949」（中国復旦大学歴史系、台湾中央研究院近代史研究所共催）2011年10月22~23日、中国上海復旦大学

李 梁、近世東アジアの新知識体系をめぐって、東アジア文化交渉学会第4回国際学会、2012年5月11日~13日、韓国高麗大学

李 梁、白鹿洞書院揭示からみた近世東アジアの「知」の空間 - 『イエズス会学事規程』との比較において -、国際日本文化研究センター・第44回国際研究集会「東アジアにおける知的交流—キイ・コンセプトの再検討」、2012年11月13日~17日、京都・国際日本文化研究センター

李 梁、イエズス会と東アジア - 知識体系の変更を軸に -、国際ワークショップ「近代東アジアの境界文化と長崎」、2012年12月15日~17日、長崎大学

李 梁、近世東アジアの伝統「知」とその変容について—比較文化史の視野から—、国際シンポジウム「近代化における東アジアの伝統と新潮流への転換」、2013年4月12日~14日、台湾大学人文社会高等研究院

李 梁、洪大容の科学理解とその実践について、科学研究会「東アジアにおける科学思想の展開に関する思想史的再検討」、2014年2月14日~15日、弘前大学人文学部

李 梁、新井白石の漢学と西学 - 朱子学的「合理主義」と真理概念の普遍性において -、国際日本文化研究センター共同研究班「心身/身心」と環境の哲学 - 東アジアの伝統概念の再検討とその普遍化の試み -、平成26年度第一回研究会、2014年5月10日~11日、京都・国際日本文化研究センター

李 梁、耶蘇會的教育思想與東亞 - 關於  
新知識体系的諸問題 - 、澳門與海上綉絲  
之路及澳門歷史文化研究会第 13 屆學術  
年會、2014 年 9 月 21 日~24 日、マカオ  
理工大学

〔図書〕(計 1 件)

李 梁 (共著)、徐光啓與幾何原本、上海交  
通大学出版社、2011 年 5 月

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

李 梁 (LI Liang)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号 : 20281909

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号 :

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :